

目的 老人福祉の中心的課題は、老後生活に入った老人の幸福感をいかにして高めるかということにある。しかし、この幸福感とは、客観的な健康や生活物資の保障のみにより得られるものではなく、主観的な満足感とのかかわりが大きい。そこで主観的満足感の客観的把握を試みたうえで、それをささえる要因を探ることとした。

方法 山口市宮野地区の住民の65才以上の老人を母集団とし、住民票より等間隔法で抽出した102名を対象に、昭和58年8月～9月に面接調査を実施した。調査にあたっては、生活満足度を測定するため、ニューガーテンラによって開発された生活満足度テストを用い、要因を探るため、個人の生活実態及び家族とのかかわりあいを問う質問項目を設定した。

結果 老人の生活満足度をその属性別にみると、初老の方が高く、加齢に伴って低下する傾向がみられた。有職の方が高く、無職の方が偏差は大きかった。性別では差はあまりみられなかったが、女子の方が偏差が大きく両極のタイプがみられた。家族状況別にみると、配偶関係では、有配偶の方が高く、その場合、子家族との同・別居関係を考えあわせると、別居の方がかなり高かった。独居別の場合、同・別居別ではあまり差はみられなかったが、同居の方が偏差は大きく両極のタイプがみられた。過去の経歴別にみると、学歴別ではあまり差はみられなかったが、高学歴の方が偏差は大きかった。過去の職歴別では、ホワイトカラーの方が高かった。更に、個人の生活実態や家族とのかかわりあいに関する項目と生活満足度とのかかわりについて分析を行ったので報告する。